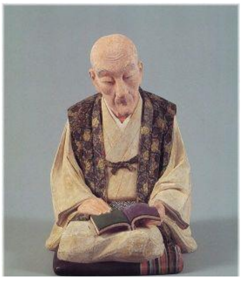
令和という時代を「君たちはどう生きる？」Ⅱ

昨年のホワイトウインターを読むと、令和元年ということもあって、標題のようなタイトルで原稿を書いていました。ちょうど吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」という漫画と文章が合体した本が２００万部を超えるベストセラーとなり、話題になっていました。原作は８０年前に書かれた本ですから、時代を越える真実をもつ本だと言えるでしょう。集会でこの本を読んだ人を聞くと、かなり手を挙げる生徒がいたのを覚えています。



「万葉集を読む良寛像」

その集会から、間もなくして新型コロナウイルスが世界で広まり、学校生活でも臨時休校の期間を経て、全校集会はできるだけ避けるというような、「学校の新しい生活様式」という対策をとるようになりました。

さて、そんな時代ですが「君たちはどう生きるか」ということを考えてみましょう。

玉島と言えば良寛さんですが、玉島の各所にある、子どもとふれあい遊ぶ柔和な良寛像の印象とは違って、若いころの良寛さんは特に「どう生きるか」に悩んだ青年でした。

玉島の円通寺で若い時代に修業した良寛さんの漢詩が､円通寺に歌碑となっていますが、「孤独」というイメージの言葉がしばしば出てきます。坐禅や修行で「悟り」を開くために、自分と向き合っていた青年良寛さんは、孤独感を抱えていたようです。さらに、円通寺時代に故郷である越後(新潟)の母親と父親を相次いで亡くしています。昔のことですから、そんな知らせが越後から届くにも時間がかかりますし、修行の身ですから簡単に帰郷することもできませんでした。そんなことも孤独感を深めたことでしょう。

越後の出雲崎という街の、名主の家に良寛さんは生まれました。良寛さんは、どちらかというと人づきあいが苦手で、何よりも読書が好きな子どもだったそうです。「論語」や「孟子」「詩経」などという中国の古典を読んでいたそうです。

名主の家を継ぐことになった良寛さんは、父のもとで見習いとなります。名主の仕事というのは、その地域の争いごとの調停をしたり、罪人の刑罰に立ち会ったりしなければなりません。さらに地域のライバル名主との間に勢力争いもあり、嘘や二枚舌を使うことも必要でした。こうしたことは、良寛の心を苦しめ、父の反対を振り切って出家する動機となりました。そして国仙和尚の弟子となり、玉島円通寺にやって来ることとなるのです。

良寛さんが子どものころを振り返って詠んだ、こんな詩があります。

一に思ふ少年の時　　　　読書して空堂に在り
灯火しばしば添ふれども　未だ厭はず冬夜の長きを

少年のころは、人のいない部屋で灯りをともして読書していたが、冬の夜長は嫌ではなかったという詩です。

生涯に渡って、良寛さんは「どう生きるか」を追い求めました。玉島の各地にある良寛像を見たとき、そんな話を思い出してみてください。

令和２年１２月　　　　校長　吉実　隆充